

# 『森の生活』からソローが見つけた三つのヒント

今泉 吉晴

はじめに

ソローは、アメリカのマサチューセッツ州のコンコードという小さな村で、里山といていいと思うのですが、近郊の森に入り、2年余り暮らしています。このシンポジウムのテーマは、ソローの名著、『森の生活』(p.1参照)にヒントを得て、これからの社会を考えていこうということです。そこで私は、ソローの考えを紹介する役目を担っているのだと思い、基調講演のテーマを「『森の生活』からソローが見つけた三つのヒント」にしました。しかし、これは非常に大きなテーマであり、また、150年ほど前の時代を生きた人の考えたことですので、はたして現在の社会に通用するものなのかどうかということもありますし、ソローの『ウォールデン』から学ぶといっても、いろいろな障害があります。それをどう乗り越えてソローについて紹介していくかということが、私の役目ということになります。

しかし、50分で全部を紹介できませんので、まず、私がどうして関心を持ったかということをお話するために、私自身の森の生活について少し触れます。そのあと、講演資料(p.9)を参照していただきながら話を進めさせていただきたいと思います。資料を紹介するだけでも時間をオーバーしてしまいそうですが、この問題は案外難しい問題なのです。

明治以来、たくさんの方が『森の生活』を訳されていて、私は15～16点かと思いましたが、今日うかがいましたら19点の訳があるそうです。難しさの一つは、翻訳が難しいことで、こういう場所で、誤訳があるということ、あまり立ち入って言う

わけにもいかないのですが、考えてみますと、私たちは外国の文化を日本語に訳しながらとり入れていかなければならないといので、これは『森の生活』に限ったことではありません。あらゆる外国の文献の翻訳は難しい問題をはらんでいます。今回、私は『森の生活』を訳させていただき、去年の4月に刊行されましたが、そのなかでたくさんの方の解釈の違いが見つかりまして、これは今まで読むのが難しかったらと思うこともありました。

また、ソローが生きた150年前は、今の日本と違って経済成長の具合はどうだったのだろうか、きつめのんびりした時代だったのではないかと考えたりします。しかし、150年前のアメリカは案外大変な時代で、有名な話では、カリフォルニアのゴールドラッシュが1849年で、だれもかれもがカリフォルニアに向かって大移動をしています。それは日本の今の状況に近いというより、もっと激しい変化があった時代ではないかとさえ考えられます。そうといったこともある程度理解しないと、なんでソローはあの時代に森の生活をして社会と自然を観察したのだろうかということは、ちょっと想像しがたいところがあります。

ソローが住んだのは里山だったというご指摘がありましたけれど、これも個人的に20～30年解けないナゾでした。ソローが住んだのはコンコードの町から1マイルぐらい離れた森の中で、1840年代のアメリカにとって1マイルという距離はほんの一步で、ほとんど問題にもならない近い場所です。1880～90年代の西部劇の時代でも、普通の人々が100キロぐらい歩くことは日常的に行われていて、100マイル歩く人もいたと

いますから、そのときに1マイルだけ森に入っていったい何をしたのか、それは森と言えるのだろうか、という疑問まで生まれたこともあります。

そういうふうな「ソローがどうして森の生活をしたか」ということについては、よほどきちんと考えていかないと、いろいろな誤解を生みます。森にたった1マイル入って、何をしたかということソローはカッコつけてしゃべっているんじゃないか、と考えることすらあるだろうと思います。カリフォルニアまで東部から出かけていく時代に、非常に田園的なのんびりした話ではないか、と思うこともあるでしょう。そういった状況とか事件とか背景も含めて、ソローのしたこと、考えたことを紹介させていただきたいと思っています。

『森の生活』の【耳よりな話】の文章そのままに即して、実証的にソローの考えたことをお話ししたいと思ひまして、私の選んだ一文(p.9)を参考に、章を追って紹介させていただきます。そして、具体的にソローが考えたこと、見たことに即して、この問題を考えてみたいと思っています。

まず、私自身の森の生活を、ほんのちょっとだけ紹介させていただきまして、そのあと、『森の生活』を見ながら、ソローの考えたこと、楽しんだことをいろいろご紹介し、最後に、今日のテーマである「持続可能な社会は『森の生活』から」ということで、ソローの「観察と実践」はどういうものであったかというようにまとめさせていただきます。と思っています。

## 今泉 吉晴 都留文科大学教授

1940年東京生まれ。東京農工大学獣医学科卒業。理学博士。20年前、山梨県都留市の森に小屋を建て、移住。岩手県の山林にも山小屋を持つ。溪流を眺め、植物の手入れをしながら森の小さな哺乳類たちの暮らしに自らも関わるという方法で、彼らの生き方の謎を研究している。著書に『がんばれひめねずみ』(新日本出版社)、『空中モグラあらわる』(岩波書店)など多数。翻訳書に『ウォールデン 森の生活』(小学館)、『シートン動物誌』(紀伊国屋書店)、『文明にとらわれた動物たち』(思索社)などがある。ヘンリー・D・ソローの生き方を描いた絵本『ヘンリー フィッチバーグへいく』『ヘンリー いえをたてる』(福音館書店)の翻訳もある。





私の森の家

私は山梨県都留市の山間に小屋をいくつか持っています。ソーローは小屋とは言わず、「家」と言いますが、私も「家」と言いたいと思います。

私の森の家は斜面の下の小さな谷間に建っています。2階は1畳に満たない、ムササビのための部屋です。下は私の住み場所ですけれども、ノネズミが自由に入ってくるようになっていきます。木の上に住むムササビ、地表を徘徊するリス、ノネズミ、地下のモグラの「マリネモの家」と言っています。そういうところで暮らしたいと思って、ときどき暮らしてみたのですが、私の場合、そこに住む決意がなかなかつきませんでした。3回ばかり、大学を辞めて、ここに住もうと思ったのですが、そのたびに連れ戻されてうまくいきませんでした。個人的なことですが、去年、「森の生活」を訳して、翻訳の作業は5年ぐらいかかりましたけれど、その間、ずっと考えて、何回も推敲して、訳注をダラッとつけて、よくよく考えて、「読めた」という感じがしました。それで、今年は大学を辞めてここに住みつこうと思っています。

今日のテーマは「現代の非常に危機的な状況に対して、どう生きるか」という問題だと思いますが、そう簡単に物事を決意することはできません。ソーローの場合、森の生活に入ったのは27歳のときですけれども、ハーヴァード大学を卒業した20歳のときから、すでに、そういうことをしたいと相当熱心に深く考えていたようです。卒業の式典のときに、キリスト教社会では1週間のうち日曜日だけ休みをとるけれども、自分は逆に生きると宣言したそうです。それが森の生活を求める決意の表明であったわけです。しかし、7年間の準備期間がありました。私の場合は、子どもの頃からそういう暮らしをしたいと思っていて、いろいろなときにいろいろな決意をしましたけれども、結局、納得がいくまでに非常に時間がかかりました。

では、森の家で何をしているか、ちょっとだけお伝えしたいと思います。

山梨県都留市は人口3万の小さな田舎の町ですが、私はそこで暮らしていて、いろいろな友人がいます。私はよく東京に出てくるものだから、町の人たちは、こいつは都留に住んでいるのか、いないのかと私を疑っていますが、仕事の都合上、どうしても東京に出てこなければならぬので、そうしているだけでして、私自身は田舎の住民で、地元の方と懇意にして、こういう会とか学会に出てくるよりも地元の方とつきあっていたほうがおもしろいという、ソーローの心境になりました。べつにソーローから教えられたからではなくて、自分でそう思いました。

懇意にしている方が、ツバメが落ちていたとか、いろいろな拾い物をしてきてくれます。ときどき決意を要するような拾い物がありまして、2002年にムササビの赤ちゃんを拾ってきた人がいます。山の奥ですし、どこで拾ったのかもわからないので、元のところに返すわけにいかず、飼うことにしたのです。

飼うということは、ベツを飼うのと同じで、十分に愛情を注いで、自分の体から離さない。赤ちゃんを放って会議なんかに出ていたら、死んでしまうか、体調を崩します。そういうことを人間はしょっちゅうやっていますが、そういうことでは育たない。ですから、私はムササビを飼う場合には会議はボイコットします。そうしなければ良い関係はつくれません。

そうすると、これはソーローとも関係しますが、ただ赤ちゃんを見ているだけで育児の仕方がわかってきます。今日のテーマの「観察」です。動物園の飼育係の方から教わらないほうがいい。間違ったことを教えてくれることがあります。たとえば、ミルクの濃度がどうだこうだ、牛乳では薄すぎるからどうしろ、などいろいろなことを言います。しかし、そういうことは肝心ではなく、いつも一緒にいて、様子を見てい

ることが大事で、きちっと見ていますと、下痢をさせずにちゃんと育てることができます。私はそういう確信を持っています。飼っているときは、学生に実況放送をしまして、私が飼う場合には絶対に下痢はさせない、絶対に生かしてみせる、と責任をもって育てていきます。

そうすると、とてもかわいくて、タオルでお尻をなでるとおしっこをします。そのあとミルクをやって、満腹になると安心して寝入ります。この時期は私の手の上で寝てくれます。こういう関係をつくっていくと順調に育っていきます。

山小屋暮らしですが、(上のほうに引かけた)私のリュックにムササビは自分の寝床をつくっています。ここは決して侵してはならない場所です。ベツを飼うと、人間の都合に合わせて動物たちの寝場所を定めようと思っても、そうすると動物たちの暮らしは直ちにメチャクチャになります。たぶん人間の赤ちゃんもそうだろうと思います。あなたのお家はここよ、この部屋で過ごさなさい、一人で寝なさい、ということをして、赤ちゃんの意思に反してやれば、必ず傷が残ります。野生動物の場合、そういう傷を残したら最後、なつてくれません。私は親ではありませんので、赤ちゃんがすべてのカギを握っています。人間の赤ちゃんならまだしも、ムササビの赤ちゃんに対して、どうしていいかわからないわけです。ですから、赤ちゃんの要求をよく見てやります。

そうしますと、だんだん高いところが好きになります。最初は私の掌でもよかったです。成長していくと、上に行かないと落ち着かないということになります。

ムササビが初めて高い木に登って、おしっこをしました。一人前のすぐ手前になりますと、高いところに登らないと、おしっこをしません。「してはいけない」という命令が本能からくるのだと思います。ですから、我慢をして、おもらしをするようになります。狭い部屋で飼っていると、高



『森の生活』からソーローが見つけた三つのヒント



くて気持ちのよい場所がないので、そういうサインから、はたしてこの子は何を望んでいるのかということを知っていくわけです。樹上生の動物ですから、当然、木の高いところに行ったら気持ちよくおしっこをするのではないかと考えられます。そのとおりで、私のところに必ず戻ってくるといふ関係ができたときに初めて木の上に放しました。これができるようになると、便秘も止まります。

ところが、馴れてしまったムササビはベット化し、野生のムササビは地面に降りないものですが、平気で森の地面を散歩するようになります。地面に対する本能的な恐怖を自分で引き出してくれるかという、いつでもそうできるわけではありません。これをどう解決するかということは、非常に難しい問題です。人間もそうですが、飼われるという文明化された状況で育った野生動物が、どういうふうにも本来の自分の性質を本能から呼び覚まして身につけていくかということが、非常に大きなテーマになります。人間が飼った野生動物の場合、必ずその重荷を背負うことになります。

これが、ソローが『森の生活』のなかで提起している問題でして、文明人は、こういう環境の中で居心地よく講演を聴こうとか、そういうふうにはすぐ考えますが、「自己家畜化」といって、自分自身が家畜になっていきます。私も実際にそれで、都市的な暮らしをしていけば太ってきますし、いろいろな問題が起きます。いちばん大きな問題は、文明化した状況が精神の成長に影響するということです。

野生動物の場合、人間に飼われるとそれが顕著に現れます。ムササビの場合、地面を平気で歩きますので、大きくなったから放そうというわけにはいなくなります。それでは、野生をどうとり戻すか。それはソローの『森の生活』にも「もっと野生的に生きよう」とか「自由に生きよう」というようなことが出てきますが、そのときの自由は野生という意味です。ところが、もし

人間が調教して、カラスは危ない、キツネは危ないと教えるとしたら、200も300も教えなければならず、受験勉強になってしまいます。受験勉強は文明化された学習のひとつの形態でして、いっぺんに200も300もある敵を覚えさせなければ野生にはならないのです。

では、どうするかというと、彼らの生活のリズムを尊重すると、あるとき、夜と昼の区別をはっきりつけるようになります。イヌを散歩に連れ出そうとすると、ものすごく喜びます。引き綱をつけて、玄関から車が走っているところに飛び出したりします。自分で散歩の時間を決めて、その時間にならなければ出ていけないということは、ほとんどないと思います。しかし、ムササビはだんだん空の暗さを見るようになります。家から早く出すぎたときに、屋根にとまって空を見て、暗さが「これでよし」と思えるまで飛んでいきません。尾を後ろから上げて、顔の前までかぶせて、隠れたつもりでいます。ときどき尾を外して空を見て、時間の調整をしています。こういうときに、「いいから、こっちへ来て遊べ」などと干渉しなければ、そういうことを大事にするようになりまして、同時に、昼に聴こえるカラスやヒヨドリ鳴き声に、危ないと警戒するようになります。そうやって本能を呼び覚まし、しだいに野生動物としての自分を育てていくことができるようです。

「森の動物たちがどういうふうに関係をつくっていくのか」ということが、私が今、研究していることなのですが、そんなことをやりながら、ここでもっと暮らしたいと思うようになりました。昔も月単位では何回も森の家で暮らしたのですが、これからは全部森の中で暮らしたいと思うようになりました。そのきっかけが、『森の生活』を読めたという経験です。そこで、どういうふうに関係をつけたのか、ということを紹介させていただきます。

## 『森の生活』より耳よりの話を一章一文

ソローの文章は、非常に抽象的で貴い話がある一方で、非常に野生的で残忍な場面とか世俗的なことなど、いろいろなことが出てきます。各章とも、そのすべてが入り交じって美しく進んでいくところがこの作品のすばらしいところだと思うのですが、普通の本のように、論理的に展開して、黙っていてもすべてが頭のなかに入ってくるというふうにはなっていません。本人もそういうふうには書いています。説得的に書くことは、環境教育のなかでも大きなテーマで、10分間で環境はすばらしいということをお伝えしたら、それはすばらしいことです。しかし、そうはなっていない、なかなかわからないものだとソローは主張しています。今日はそのことにはあまり触れませんが、そういうふうになっていくので、普通の本を読んだ目には話があとこち飛びすぎてわかりづらいと思います。

そこで、全編を通してどんなことが言われているかということ、十八章の各章を一文で見ていけると、全体の姿が割合クリアに出てくるかと思います。ソロー自身、『森の生活』を皆さんにぜひ読んでもらいたい、自分が発見した“耳よりの話”を伝える文章なんだと言っています。実際、非常に耳よりの話がたくさん出てきます。

## 一章 経済

「私は五年を越える歳月を自分の手で働いて生きた経験から、年に六週間ほど働けば、暮らしに必要なあらゆる代価をまかなえることを発見しました」

ハーヴァード大学の卒業式で、自分は1週間のうち1日だけ働いて、ほかの日は休み、その間、自分の感覚を十全に働かせて、森や人間社会の観察をする、と言いました。それを年に換算した数字です。森の生活をした2年余りを含めての5年の実験で、言葉どおり自分で食べ物をつくって生きています。これが彼の言う経済です。



『森の生活』からソローが見つけた三つのヒント

人間は、そんなにものすごく働かなくなっ  
て生きていける。これは当たり前のこと  
です。野生動物や植物の暮らしは大変なよ  
うに見えますが、それでも人間ほどは働い  
ていません。人間はちょっとずるい動物で  
して、野生動物や植物の裏をかいていく  
らでも資源をとってこられるわけです。で  
すから、人間という生き物を自然界と一  
緒に生かすのだったら、1週間に1日ぐ  
らい働けば生きていけるだろう、実際  
にやってみたらそのとおりだった、とい  
うわけです。こんなに耳よりな話は少な  
いだろうと思います。私の手応えでも、  
そうだろうと思います。病気になった  
ときはどうするんだと言われますが、こ  
れについても、『森の生活』のなかでは、  
間接、直接に答えています。そういった  
ことも考えたうえで彼の結論です。

一章の なかに「聖なる自然の楽しみは  
空へと霧散しているではないか」とあり  
ます。私たちは、こういう部屋に入っ  
て、一見、安楽ですけども、空が見  
えて、風が吹いていたら、どれほど楽  
しいかと言っているわけです。やれば  
やるほど、こういう世界から遠ざかっ  
ている。ですから、ものをつくるた  
めに働くことは、どういう意味を持  
つかということも考えなければなり  
ません。私は、初めてこんなすごい  
講義室を見まして、パワーポイントの  
映像がこんなにきれいに映るところは、  
今まで経験したことがありません。け  
ちをつけるわけではなくて、そうい  
うふうを考えれば、働くということに  
ついて、もうちょっと楽になるの  
ではないかということこそをソローは  
指摘しているのだらうと思います。や  
ればやるほど自然の楽しみがどこか  
にいつてしまう。自然の楽しみとは、  
きれいな空気を吸う、雪が溶けてい  
くのを見る、といったことですが、  
それが減っていくと指摘しています。

第一章で、経済、暮らしをどう立  
てるかということ、非常に丁寧に論  
証していますので、全体のなかで、  
第一章は非常に長

くなっています。

二章 どこで、なんのために暮らした  
か「私が森で暮らそうと決めたのは、  
暮らしをつくるものとの事実と真正  
面から向き合いたい、と心から望ん  
だからでした」

人生、どこで暮らしたらいいか。経  
済はこういうふうに解決した、人間  
はそういうふうにできているとわか  
った以上は、楽しい場所がよいに決  
まっています。駅の近くはうるさく  
しょうがない、森の中がよいに決  
まっているというのですが、森の中  
がよいというのは、問題を整理す  
るのにはつきりするということだけ  
のことです。文明の要素が消えるた  
め、いろいろと戸惑うことが少な  
いという意味なので1マイルでよ  
かったわけです。いろいろな煩わし  
さから離れるということで、二章は、  
人間は人生のある時期に、どうい  
う場所に住みたいか、ということ  
を考えるものだというのです。

私もしょっちゅう考えまして、電  
車の窓から森の谷川などが見えま  
すと、ぜひ住みたいと思いました。そ  
して、そういうものをどんどん手  
に入れまして、実は10カ所も20  
カ所もそういう場所を持っています  
けれども、そこで暮らす時間がない  
。つまり、一章をちゃんと実践し  
ていないというのが私の立場です。

### 三章 読書

「いったいどれほどの数の人が本  
に親しむことを通じて、人生を開  
いたでしょうか。本が、生きるこ  
との不思議をとき、新しい生き方  
を暗示しました」

全部、自分の気持ちに聞いてい  
くというところで話が続いていき  
ますので、三章はそういうこと  
について古典は何を言っている  
か、ということと読書をしていま  
す。すばらしい本はたくさんあり  
ますが、ここでのポイントは古典  
です。彼は古典の言葉をきち  
っとできるのですけれども、プラ  
トンは読み通していないと告白  
しています。現代の優れた本が  
いちばんよいと言っています

て、けっこうミーハーだと思いま  
すが、そういった本から学んでい  
たらいいだろうということです。

### 四章 音

「文字ばかり読んでいては、世  
界のあらゆる物と出来事が、じ  
かに私たちに語りかける言葉  
であることを忘れます。物と出来  
事こそが最高に豊かな言葉であ  
って、私たちの標準語です」

四章は、元に戻って古典をチェ  
ックし、それはそれで大事けれど  
も、身の回りのざわめきとか風  
の音のほうが、世界について多  
くを知らせてくれるということ  
です。言葉になっているものよ  
りも、現実世界の身近な現象に  
絶えず気を配る。散歩の楽しみ  
はそれですね。私たちはイヌの  
散歩に出かけますけれども、し  
ばしばイヌは楽しんでいるのに  
人間のほうは楽しめない。イ  
ヌの散歩は退屈だと思う人が  
いるくらいでして、そういう意  
味で、ソローの言うことを実  
践するのは非常に難しいであ  
らうと思います。「物と出来事  
こそが最高に豊かな言葉であ  
って、私たちの標準語です」と  
いうことで、感覚を使おう、感  
覚を楽しませよう、というのが  
この章です。

### 五章 独り居

「自然にも、私が親しみ、使  
い込んで自分のものにしてい  
るところ、いわば自然から奪  
って私のものにした領域があ  
ります。ではなぜ、私はこの数  
平方マイルにもおよぶウォール  
デンの森を、自分が動き回る  
領域として手にしていただける  
のでしょうか？」

五章では、独りで暮らすこと  
がいいでしょうということ、  
独りの楽しさのなかで発見  
したことを書いています。独  
りで森の家にいると訪問者  
があります。たとえば、親友  
が訪ねてくれますので、独  
りでいることは、かえって  
友達とよい関係をつくる。よ  
けいな会議などはないとい  
うことになりま



### 第六章 訪問者たち

「私の森の家には椅子が三つありました。ひとつ目は独り居のため、ふたつ目は良き友のため、三つ目はみんなのためでした」

本当に必要な人たちが集まってくる。孤独、独り居を経験するなかから、より高い社会性に目覚めていくというのが第六章です。

### 第七章 豆畑

「豆作りは、ほかに得がたい楽しみで、私は放蕩になりそうでした。私は畑に肥料を施さず、絶えず鍬を入れ続けるようにしました」

家をつくったり、いろいろなことをする一方で、自分が食べるための豆の畑をつくる経験が語られます。当時、エコロジーという言葉ありませんが、七章は非常にエコロジカルな章になっています。「秋に収穫する豆とは、本当には誰のものでしょうか？」と書いています。豆作りはあまりに楽しくて放蕩になりそうだと書いていますが、そこから学んだものは「太陽から見れば、大地のすべてがみごとなエデンの園です」ということで、太陽や雨が育てたものを人間がひとりですべていいのか、という章になっています。

こういうふうが続いていきますが、どの章も自分の経験だけで書かれています。古典からの引用は、自分の問題を論証するために使っていません。ほとんど自分の経験を語って結論に到達するのがソローの本の特徴だと思います。

八章の「村」の一文は、省略します。

### 第九章 池

「人間社会とゴシップにつかされると、私は散歩を西へ進め、“新しい森と初めての草地”を訪れ、夕方にはフェア・ヘーブン丘に向かいハックルベリーとブルーベリーの食事を楽しみ、数日分の貯えをつくったりしました。これらの野生の果実の風味は買って食べる人や、市場のために栽培する

人には知りようがありません」

九章は、楽しい自然とのつきあい、観察です。散歩しながら野生の果実をとって食べる。結果だけを求めるなら、都会の果実屋さんからも野生の果実を買うことができますが、それを得るまでの散歩とか美しい経験を含めて食事をするのが、人間として生き、食べるということの本当の意味です。どうせ生きるなら、というのは変ですが、生きる以上は、そういったすべての楽しみを楽しみたいと、「池」の章は自然の楽しみを代表しています。

### 一〇章 ベイカー農場

「時に私は、マツの森へふらりと散歩に出ました。私の目にマツの森は、壮麗な異教の寺院に見え、あるいは大海原をゆく、帆をいっぱい広げた商船隊に見えました。堂々たるマツの太枝が風にゆれ、太陽の光を受けてきらきらと輝くさまがあまりにもみごとでした」

一〇章の「ベイカー農場」は、あとから来たアイルランドの移民の方たちが安い賃金で湿地を開発して農地になっていますが、それはどういう意味があるかということをお聞きします。ここは、ソローの「観察から実践へ」というところですね。開発の行為、自然の楽しみ、豊かさが失われていくことに対して、どうするかということですね。

ここで実際行動をいろいろするわけですが、より深く自分が判断できて、自分の言うことが正しくて、ほかの人が間違っているということ、ある程度言えるのはどうしてかということをお聞きします。それが一一章の「法の上の法」です。

### 一一章 法の上の法

「私は、多くの人と同じように崇高さを求め、精神的に豊かに生きたい、と望む本能が働くのを意識しています。私は、一方で野生の本能が働くのを感じており、こちらでも等しく尊重しています。つまり私は、人

間性に劣らず野生を愛しています」

法律があるので、土地を買って勝手に開発することはべつに悪いことではありません。しかし、自分の本当の気持ちは、それは人間にとってよくないことではないか、ということをお聞きしています。それが正しいかどうかということをお聞きするのが「法の上の法」で、ここでは自分の本能を鍛えます。ムササビの赤ちゃんを育てるのと同じように、自分の本能あるいは野生を育てるのに、どうしたらいいか。私たちの趣味としての狩猟とか魚釣りの効用とか、私たちはどうしてそういうことを好むのか、ということが書かれていきます。ここで、そういうことが検討されて、自分の確信をつくっていくことになります。

一二章の「動物の隣人たち」の一文は省略します。

### 一三章 新築祝い

「私は自分でつくった暖炉の煙突の内側にすすがつくのが楽しみで、歓びと満足をもって暖炉の火を勢いよく燃え立たせました。ひと部屋の家は、いくつもの部屋に分かれたふつうの家のよさが一つにまとまっています。私の部屋は台所であり、寝室であり、客間であり、居間でした。小さな家だからこそ、私は大人と子どもの楽しみ、主人と召使の楽しみ、その他あらゆる家の暮らしの楽しみを満喫できました」

一三章は、今までは「暖房」と訳されてきました。森の家がとりあえず住めるようになるのは7月ですが、秋にしっくい塗って最終的に完成し、そのお祝いの章です。家との交流、「人間にとって家とは何か」ということを検討するわけですね。のちの建築家にソローの考えが採り入れられるようになる、ひとつの重要な章です。「家とは何か」ということは、私たちにとっても非常に大きなテーマだと思います。私たちは家を建てることで、ほとんど一生を棒に振るわけですけども、家とはどういう意味があるかということですね。



『森の生活』からソローが見つけた三つのヒント

一四章の「昔の住人と冬の訪問者」、一五章の「冬の動物」、一六章の「冬の池」と、冬の季節に入ります。森の家を訪れる人は少なくなり、そういうときに訪れてくるのは詩人です。しかし、動物たちはどんどん帰ってきます。冬の暮らしを通じて、深い心のつながりのある人たちとの交わりとか、野生の生き物とのふれあいが描かれていまして、『森の生活』のなかでいちばん美しいところだと思います。

#### 一七章 春

「私が森で暮らしたらどんなに楽しいだろう、と想像した理由の一つは、春がやってくるのを知る、豊かで確かな機会と自由に贅沢な時間を持つことでした。ついに池の水がハチの巣状になると、私は靴の底が氷の面にめり込んで足跡を残すのを感じて散歩しました。私は春の兆しを捕まえようと感覚を研ぎすませます。春の鳥の鳴き声が微かでも聞こえないだろうか、シマリスの地下の食糧庫の貯えも切れ、あの甲高い声が聞こえるかもしれない、それにウッドチャックも冬眠用の巣穴を出たくてうずうずしているはず、巣穴を抜け出るころを見れないか、と期待します」

この本は季節を追っています。四季の変化を楽しむことが人生の大きな楽しみだということで、一七章の、春の精神の高揚のなかで、この本は閉じられます。

#### 一八章 結論

「死んだライオンより、今、生きているイヌが素晴らしいに決まっています。誰もが自分の力で大きくなればいいのです。まずは自分に最善をつくし、あるがままの自分を生きようではありませんか」

一八章は全体としての結論で、これも当たり前のことですが、すべての経験を含めて、「死んだライオンより、今、生きているイヌが素晴らしいに決まっています」といいます。つまり、自分が大事に決まっている、自分が生きていることがいちばんで

あるということです。昔の人は偉かった、ソローは偉かった、と言っても始まらないわけで、今、生きているイヌが素晴らしいに決まっている。だれもが自分の力で大きくなればいい。「まずは自分に最善をつくし、あるがままの自分を生きようではありませんか」ということです。

この本では、芸術家が素晴らしい絵を描くことを褒め讃えています、それ以上に自分自身を納得のいくように美しくつくっていく作業こそ、最高の芸術ではないか、ということとを別の言葉で言い表しているわけです。

それにくっつけるかたちで、「私たちはほとんどいつも決まって、今、取り組んでいる事態を誤解する」と非常に重要な指摘をしています。これが今回の私たちのテーマの「実践」の部分に当たると思います。私たちは、グローバリズムが大事だと言いますが、それは正しいのか。それを正しいと思って「そこで生起する出来事を間違えて解釈しています」。国際化の時代だから英語を勉強するのが大事だということけれども、英語を勉強することが正しいかどうかかわかりませんし、その枠組みも間違えていたら、二重の誤りになります。その誤りから脱出するのは非常に難しい。私たちが今、陥っている問題はそこにあるわけで、今日のテーマもまったく同じだと思います。「持続可能な社会」は、今まで達成されたためしがないのです。そういったことに挑戦すると、正しいように見え、そのうえで、こうすることがいい、と決めていくわけですけれども、それはいいかどうかということです。

ソローの結論は、「自らの宇宙の、熟達のガイドになろうではありませんか」ということです。自分を知ることが第一ということで、先ほどの結論の言い換えになります。

さらに実践的なことをつけ加え、「社会の聖なる法(公法)」にもまして人として尊重すべき「法の上の法」があり、それに従うには真の勇気を要します」といいます。

私たちの日本語の世界では法とは成文化された法ですけれども、自然の法則は英語では同じ“law”です。ここでいうのは、そういうものも含めた「法」です。ゴルフ場をズラッとつくるより、自然の法に従ったほうがいいかもしれません。

#### ソローのあと

ソローのあとの時代がどうなったかといいますと、アメリカは土地投機で沸き返りました。先住民から土地を奪い、そこに鉄道がどんどん敷かれていきます。ソローが生きた人生の前半は運河の時代で、後半が鉄道の時代になります。大陸横断鉄道ができて、バッファローなどが皆殺しになり、併せて先住民が虐殺されていきます。そのなかで、土地に投機する大金持ちが出てきて、その結果、『怒りの葡萄』という有名な小説がありますが、オクラホマとかニューメキシコなど、アメリカの中西部に砂嵐が巻き起こります。現在、中国でも起こっていますが、あれは古代からずっと続いていることで、間もなく大変なことになると思います。もうひとつ、ギリシャ文明も砂漠化によって滅びていきます。古代文明は非常に長い時間をかけてそうなりましたが、アメリカはたった50年で、先住民が豊かに暮らしていた大地を、土地投機の結果、砂嵐に巻き込みます。

私が好きな動物作家のシートンの傑作である『オオカミ王ロボ』の舞台になったクレイトンの町で、牧場として買い占めた人が、20世紀に入り、東ヨーロッパからドットと入ってきた新移民に農地として売ります。はっきりいって、だましたのだと思います。何年か経ちますと、牧場と違って、地表を耕しますので、土が表面に出て、そこに風が吹くと、猛烈な砂嵐が起こります。この中に入りますと、人間も家畜も死にますので、オクラホマの住民はカリフォルニアに逃げ、その大変な事態が『怒りの葡萄』という小説として描かれるわけです。



どういう過程でそういうことが起こったかということです。テキサスのパンハンドルという場所で、長さが約500キロあるXIT牧場をイギリス資本が買います。たった一つの牧場ですが、日本を縦断するような広い土地で、これを移民の方たちに売った結果、環境破壊となったのです。

そういう大規模な金儲けが、現代の環境破壊の大きな要因になっていることは明らかです。これをどう調整していくかということですが、アメリカについていえば、こういった国内でやっていたことを、今、世界規模でやっています。日本もそれに参加してやっているわけです。

ソローの結論は、まず「自分を鍛えろ」ということです。こういった事態に対して、世の中の観察して、それではダメではないか、と勇気をもって言えるような人間になろうではないか、というのが『森の生活』の呼びかけです。

そこで彼は、一度、税金を払わずに捕まってコンコードの監獄に入れられます。それが『市民の抵抗』(“Civil Disobedience”)という本になっていますが、そのことについては『森の生活』にも書かれています。彼は、奴隷制を維持するような政府には税金は払わないことが正しい行動だと、自然観察と社会観察のなかから結論的に判断していくわけです。その過程を十分にお話することはできませんが、今日お話したことの中で、野生を育むということで連帯することは、その時代にあっては、ちょっと難しかったのだと思います。キリスト教社会のなかで、あえて自分は違う生き方をすると宣言したうえでの話ですので、『森の生活』のなかでは、個人として納得のいく生活をする結論しているのです。しかし、個人のことだけをやっていただけではないということを紹介しまして、『森の生活』でソローが言いたかったことを現代に生かしていくことを考えていきたいと思っています。



『森の生活』からソローが見つけた三つのヒント

## 『ウォールデン—森の生活—』（今泉吉晴訳）より耳よりな話を一章一文

### 第一章 経済

私は五年を越える歳月を自分の手で働いて生きた経験から、年に六週間ほど働けば、暮らしに必要なあらゆる代価をまかなえることを発見しました。

### 第二章 どこで、なんのために暮らしたか

私が森で暮らそうと決めたのは、暮らしをつくるもとの事実と真正面から向き合いたい、と心から望んだからでした。

### 第三章 読書

いったいどれほどの数の人が本に親しむことを通じて、人生を開いたでしょうか。本が、生きることの不思議をとき、新しい生き方を暗示しました。

### 第四章 音

文字ばかり読んでいては、世界のあらゆる物と出来事が、じかに私たちに語りかける言葉であることを忘れます。物と出来事こそが最高に豊かな言葉であって、私たちの標準語です。

### 第五章 独り居

自然にも、私が親しみ、使い込んで自分のものになっているところ、いわば自然から奪って私のものにした領域があります。ではなぜ、私はこの数平方マイルにもおよぶウォールデンの森を、自分が動き回る領域として手にしていただけるのでしょうか？

### 第六章 訪問者たち

私の森の家には椅子が三つありました。ひとつ目は独り居のため、ふたつ目は良き友のため、三つ目はみんなのためでした。

### 第七章 豆畑

豆作りは、ほかには得がたい楽しみで、私は放蕩になりそうでした。私は畑に肥料を施さず、絶えず鋤を入れ続けるようにしました。

### 第八章 村

私には、村の全体が、ひとつの巨大な新聞編集室のように見えました。

### 第九章 池

人間社会とゴシップにつかれると、私は散歩を西へ進め、“新しい森と初めての草地”を訪れ、数日分の貯えをつくったりしました。

これらの野生の果実の風味は買って食べる人や、市場のために栽培する人には知りようがありません。

### 第一〇章 ベイカー農場

時に私は、マツの森へぶらりと散歩に出ました。私の目にマツの森は、壮麗な異教の寺院に見え、あるいは大海原をゆく、帆をいっぱいに広げた商船隊に見えました。堂々たるマツの太枝が風にゆれ、太陽の光を受けてきらきらと輝くさまがあまりにもみごとでした。

### 第一一章 法の上の法

私は、多くの人と同じように崇高さを求め、精神的に豊かに生きたい、と望む本能が働くのを意識しています。私は、一方で野生の本能が働くのを感じており、こちらも等しく尊重しています。つまり私は、人間性に劣らず野生を愛しています。

### 第一二章 動物の隣人たち

私たちはなぜ目に見える動物だけを隣人と思うのでしょうか？ それでは、私たちと世界をつなぐ動物は、家に住むハツカネズミだけと考えるのと同じです。インドの動物寓話作家、ビルバイとその仲間たちは、動物に“考え”という“荷物”を読者に送り届ける役、つまり荷役動物の役を割り当てています。

### 第一三章 新築祝い

私は自分でつくった暖炉の煙突の内側にすすがつくのが楽しみで、欲びと満足をもって暖炉の火を勢よく燃え立たせました。ひと部屋の家は、いくつもの部屋に分かれたふつうの家のよさが一つにまとまっています。私の部屋は台所であり、寝室であり、客間であり、居間でした。小さな家だからこそ、私は大人と子どもの楽しみ、主人と召使の楽しみ、その他あらゆる家の暮らしの楽しみを満喫できました。

### 第一四章 昔の住民と冬の訪問者

私は陽気にうかれさわぐ吹雪をやり過ごしながら、冬の夜を炉辺で心ゆくまで楽しみました。家の周りでは雪が渦を巻いて激しくふり、フクロウさえ鳴かずに引きこもっていました。私は散歩に出て、何週間も、ほとんど一人も会いませんでした。人の仲間という、私は昔この森に住んだ人々を呼びさすほかありませんでした。コンコードの町の人の記憶によると、私の家の近くを通る街道ぞいにかつて、大勢の人が住み、笑い声やうわさ話のざわ



めきが聞こえました。人々は街道の脇の森をひらいて小さな家を建て、庭を作っていました。

#### 第一五章 冬の動物

私は、開けた雪原を歩いていてライチョウを飛び立たせたことがよくありますが、それは日没時に森を出て野生のリンゴの木の芽を食べに来ているからです。彼らには夜ごと決まったリンゴの木を訪れる習性があり、狡猾な狩猟家はそんな木で待ち伏せします。森に接する果樹園の被害はかなり深刻です。それでも、私はライチョウが食物をうまく手に入れているのを知ると、嬉しくなります。

#### 第一六章 冬の池

静かな冬の夜が開けました。私は夢で何かを問われ、どう応えようと迷ううちに、目覚め、すっかりしない気分でした。でも、目覚めた私の周りには、生きとし生けるものが暮らす自然の、美しい夜明けでした。家の窓からのぞく母なる自然は平和に満ち足りていて、彼女の唇はなにも問うてはいない、と私は感じました。私はすでに応えられた問い、つまり本当の世界、母なる自然、太陽の光の中に目覚めていました。

#### 第一七章 春

私が森で暮らしたらどんなに楽しいだろう、と想像した理由の一つは、春がやってくるのを知る、豊かで確かな機会と自由で贅沢な時間を持つことでした。ついに池の氷がハチの巣状になると、私は靴の底が氷の面にめり込んで足跡を残すのを感じて散歩しました。私は春の兆しを捕らえようと感覚を研ぎすませます。春の鳥の鳴き声が微かでも聞こえないだろうか、シマリスの地下の食糧庫の貯えも切れ、あの甲高い鳴き声が聞こえるかもしれない、それにウッドチャックも冬眠用の巣穴を出たくてうずうずしているはず、巣穴を抜け出るところを見えないか、と期待します。

#### 第一八章 結論

死んだライオンより、今、生きているイヌが素晴らしいに決まっています。誰もが自分の力で大きくなればいいのです。まずは自分に最善をつくし、あるがままの自分を生きようではありませんか。